1991年10月20日　反原発新聞（第165号）

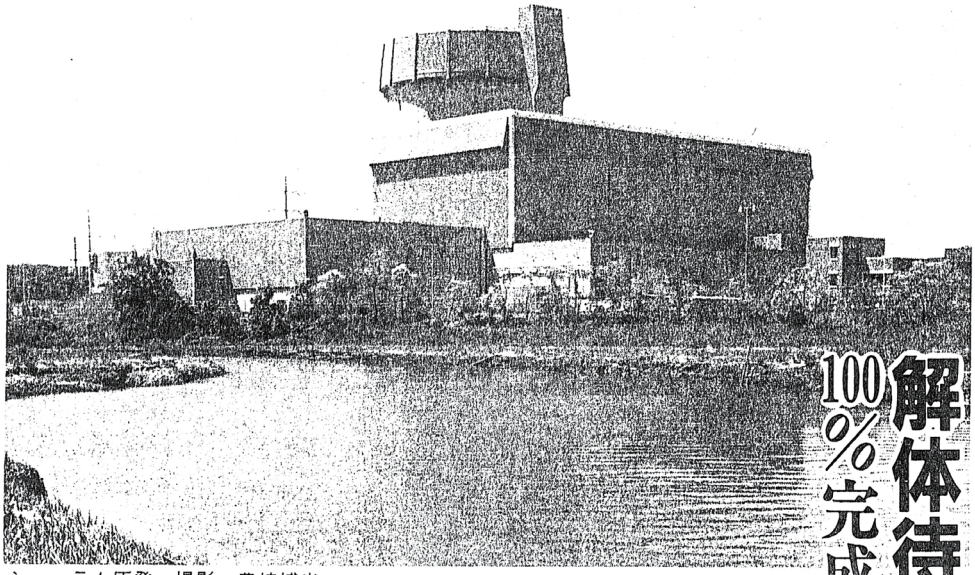
地域防災計画が問題だらけだと指摘した住民の運動によって

1989年に営業運転もせず、1ドルで売却された原発

解体待つショーラム原発

100%完成した原発をどう止めたか

語る人　バーバラ・ニューマン
まとめ　アイリーン・スミス



ショーラム原発　撮影＝豊崎博光

米国ニューヨーク州ロングアイランドにあるショーラム原発は、住民の長い反対運動の結果、いよいよ解体されることになった。廃棄処分が決まった一九八八年五月以降、推進側は巻き返しをはかっていたが、最高裁でこの夏、とうとう敗北したのだ。一〇〇%完成していたこの原発を止めたのは、「住民避難の計画が不十分だ」という住民の主張だった。ショーラムを止める住民運動「ロングアイランド安全生活合同委員会」の中心にいたバーバラ・ニューマンさん(49)に、どう運動をつくったのかをお聞きした。

＊

周辺の住民に働きかけたの。「そんなに安全なら、どうして私たちを避難させるの？」「避難はいったいどうやるの？」って。原子力は怖いもの。だから怖がらせなくっちゃ。感情的になるのを恐れてはいけないわ。とにかく地域に根づいた運動をすることね。そして地元の政治家に働きかけて、協力してもらうようにもっていく。

人間は、自分が実際に被害を受けることがないと、なかなか関心を持たないでしょ？だから、問題の原発が相手にどのような害を与えるかを、必ず説くの。農民には、田畑が永久に汚染されると言う。金持ちのビジネスマンには、土地の価値が下がることを考えさせるの。事故の際、障害者や老人ホームはどうなるのか。水道局の労働組合、ホテル業界、保育所関係の人たちに訴え、郡議会などで取り上げてもらったわ。

事故の場合、具体的にどこにみんな避難させられ、除染されるのかを調べたの。避難先は六十km離れたナソー郡にあるコロシアム。「汚染された車はどうなるの？　除染に使った水はどこに流れていくの？」「病院の受け入れ体勢はとれているの？　対応する医師は、放射線技師は、看護婦はどこのだれ？」と問いかけたわ。学校も避難場所になっていた。PTAにそれを伝えると、みんなほんとうにびっくりしたの。

政治のシステムのど真ん中に入っていかなくちゃだめ。州が人びとの健康と安全を守る責任を持っているんだから、それを大きく宣伝する。でも、まずは郡レベルからスタート。そこで経験を積み重ねながら作戦もうまくなって、州に挑戦したのよ。とにかく一人でも応援してくれる郡議員を見つけること。その人がまた別の人を紹介してくれるわ。→

地域の婦人有権者同盟などに働きかけ、会長さんたちに一人でも二人でも参加してもらい、私たちはその周囲で、あたかも同じ団体から来たみたいに、スーツにヒール、帽子をかぶって立ったりもしたわね。そんなふうに、あの手この手を使ったの。鏡を組み合わせたときのように、少ない数でも多く見せる工夫をしたわけよ。

はじめたときは、サフォーク郡の十八人の議員のうち、私たちの味方は一人だけだった。それが最終的には全員がショーラムに反対となり、議会として法律事務所をやとって原発に対抗。やがて大きな政治問題となって、やっと私たちは知事と対面できたの。その一時間ほどの話し合いで、彼はショーラムに反対する決断をしたのよ。

種を植えていくわけよね。そしたら、太陽も水もやってきて、いずれその種は育つのよ。そうして実をつける。だから、いろんなことを同時にやること。いつ何がどう実るかわからないわ。

＊

とにかくしつこく、あきらめないでやるんだ――ということが、バーバラさんの話で一番印象に残った。